



## 秋田県が学力日本一はなぜ

北条 常久

(あきた文学資料館名誉館長)

秋田県が、全国学力調査で、小中が学力優秀なのは、有名である。全国から視察団が入る。他県の教員が、本県の小中学校に留学して来たりもする。その本県の中でも、特に有名な東成瀬小学校は、まるで有名観光地のように、観光バスが訪れる。

私も、東成瀬村を訪ねたことがあるが、山深い深雪の村で、ここが学力日本一の村と言われても、秋田県の各地にある村々とさして違くないように思われる。秋田県の高学力の理由を県の教育関係者に質問しても、「当たり前のことを行っているだけ」という答が返ってくるだけである。「秋田わか杉っ子 学びの十か条」には、①早ね早おき朝ご飯に家庭学習、②学校の話で弾む一家団らん、③読書で拓く心と世界、④話して書いて伝え合う国語（中略）⑨筋道を立てて伝わるように、⑩学んだことは生活で学校ですぐ活用とあり、秋田県の学校と家庭での生活指導に重心がかかった指導が、学力の高さを生み出しているのであろう。

本県の学力は全国で最下位といわれた時期があった。

戦後、学校制度が改革され、義務教育が九年となり、「六三制野球ばかりがうまくなり」と川柳に詠まれる、戦後っ子の学力が危惧され、文部省（当時）は昭和33年度から新学習指導要領の告示の方針を固めた。そのために、子どもたちの学力を知る必要があり、昭和31年9月

28日全国学力テストを実施した。学力調査は、小学6年、中学3年、高校全日制3年、同定時制4年で、計1万校、生徒数にして120万人という大規模なものになった。

調査目的が、学校の生徒数、環境、教育費などと学力との相関関係をも視野に入れたものだけに各方面から注目され、小中学生の試験問題は、新聞各紙に掲載された。国全体の教育の現状把握と今後の展望を見据えたものであったのに、翌年結果が公表されると、各都道府県、学校、生徒個人の学力比べの様相を呈してしまった。

本県は、小学校が国語、算数ともに全国最下位、中学も国語最下位で数学が下から2番目という不名誉な成績に終わり、全県に波紋が広がった。

それでは、昭和31年当時、学力最下位であったものが、60年後の今日、最上位になるものだろうか。もし、それが事実ならそこにはどんなドラマが秘められていたのだろうか。興味しんしんである。

私は、その真実が知りたくて、文部科学省から、第1回学力テストの問題を取り寄せて自ら解いてみた。

小学生の国語は、語彙、文章表現、読解の3部門に分かれていた。このうち、語彙テストは、四つの選択肢から正解一つを選ぶもので、「つぶやく」の意味を問う問題の正答率が81.9パーセントと最も高かった。文部省の報告書はその理由を「どの地方でも生活化しているから」と

している。しかし、本県の子どもは「つぶやく」を「タニシを焼く」と誤って回答した例もあった。また、漢字書きとり問題で「学級ブンコの本をカリる」とあったが、本県では学級文庫のない学校が多く、ぴんと来ない子もいた。文法の問題では「くつづれができた」の「づ」という仮名の正否を問う問題があったが、地方ではまだ靴を履かない子どもが多かった時代ではなかったか。

小学生の算数では、時計秤の目盛を読む問題があったが、当時の秋田は棒秤で時計秤を見たことがない子どもも多かったに違いない。

本県の小中生の学力が低かったのではない。問題の問い方が、地方を無視したもので、子どもたちにとっては、何を質問されているのかが理解できない問題が多かったのである。

第1回の学力テストで、都会と地方の学力差は明確になったが、それはとりも直さず文化、生活の格差でもあった。それを象徴的に表しているのが、中学校の語彙のテストである。新聞用語から選ばれた「権利」、「永久」の正答率が低く、生活用語から選ばれた「名誉」、「とぎして」の正答率が高い。秋田では、中央紙は一日遅れて配達されていて、県民の新聞への意識は低かった。学力差は明らかに文化差であった。

しかし、昭和35年の60年安保前後から民衆の政治、文化への意識は高まり、学校現場で、「④話して書いて伝え合う」、「⑨筋道を立てて伝わるように」（秋田わか杉っ子 学びの十か条）が意識されるようになると、語彙力、読解力、大きくは国語力の不足が、生徒会活動、グループ、部活動に障害をきたすことが明確になった。

秋田県には、伝統的に、自らの生活を見つめる生活つづり方の北方教育、明治維新以来、生活の不便さを脱皮する話しことばを学ぶ標準語教育という生活に根ざした国語教育があった。

戦後は、この二つの教育は新カリキュラムによって制約を受けていたが、60年代の民衆の意識の昂揚により復権した。秋田県の各地で、出稼ぎの家族に励ましの手紙を送ったつづり方による北方教育、集団就職での都会の生活で不便をしないための標準語教育。その二つの教育は秋田県全体に広がり、秋田県の国語学力が目に見えて向上した。

昭和37年度の学力調査を、県教育委員会は、次のように総括している。（『魁年鑑』）

学力調査は、一般に僻地校の成績が悪かったが平鹿郡の分校が中学3年の国語で全国最高の成績をおさめ、本県教育界に明るい光りを投げかけた。この分校は生徒数15人、先生2人という典型的な僻地校、県平均52.5点、全国59点だが、同校は92点という好成績だった。作文教育が成果をあげたこと、個人指導が徹底したのが原因と県教委ではみている。

この分校は、私が訪ねるとその記録は、統合された山内小学校に残っていた。その当時の様子を聞くと、冬期には生徒と先生は同じ季節分校に住み、春になってその分校を去る時の彼らの別れは春の悲しい風物詩であったという。

標準語教育実践者として喧伝されている遠藤熊吉が、定年の昭和4年まで今や学力日本一として名高い東成瀬小学校の校長としてハイカラな自転車を懸命に踏む姿もよく知られている。

秋田県の学力日本一への出発は、へんぴな村々の山間地の人びとが生み出した汗の結晶である。